

Dragon Slayer

裏腹

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

とある竜と、竜殺しの話。

D
r
a
g
o
n

S
l
a
y
e
r

目
次

Dragon Slayer

星降る夜——とは、よく言ったものだ。

際限なく落ちてくる銀色は確かに輝いていて、街明かりに煌めく様相は、まごう事なき夜空の光そのもので。

シンジヨウは真黒い空を翔けながら、素肌を突き刺すような雪の冷たさに、十二月を見る。

「……一年も経てば、忘れるものか」

或いは、初めから無関係なだけか。

言いたい事の半分は言語にせず、白む吐息で濁した。

リザードンの背中越しに覗き込むのは、クリスマスイルミネーションで飾り付けられたルシエシテイの町並み。

ほどなくして深夜に差し当たる時間でありながら、未だ街には一定の活気が残っている。緩慢に流れゆく銀世界を見下ろしながら、再び一息。今度は深く、長く。

どうして自分がこんな真似をしているのか——ほんのり目を細める。皆まで言わずとも、そういう顔。

周囲もきつと訊ねるだろう。何が悲しくて、聖夜に凍えそうな真冬の空を相棒と飛んでいるのか、と。

事は数日前に遡る。



その日、シンジヨウは突如としてヒメヨに呼び出された。

待ち合わせ場所はバトルキングダム内のカフェ。バトルの申し出かと思い、手持ちも万全の状態にして赴いてみれば。

「二四日なんだけど、コスモスちゃんの誕生日なのよね」

「……は？」

あらぬ方向からの切り出しで、とんだ肩透かしをくらったのを覚えている。

「……俺に、祝えと？」

「んー……半分正解で、半分はずれ、かな」

頼まれれば、特段拒むことでもなかったが……隠された事情を知った時、彼の内心は忽ち渋くなった。

「コスモスちゃんね、お誕生日を祝われることを拒んでいるのよ」

曰く、去年から。

その言葉だけで、容易に察せた。

「プレゼント禁止は勿論、『誕生日』も禁句。おめでどうを言おうものなら屋敷を吹き飛ばす、まで言っちゃってね……」

「タブー、だな。さしずめ」

全ては、直前に起こった『雪解けの日』のせいだ。

「要は、自粛。変なところで変なことまで覚えてきて……旺盛な好奇心も、考え物よ」

期間は、ネイヴユが完全に復興するまで。

これによって誰が助かる訳でも、何のためになる訳でもない。

それでも人は不幸な身の上にあると、えてして幸福な者を恨みがちだ。ましてその対象が目立つ存在であればあるほど、余計にそのきらいが強くなる。

悲しき哉、性であろう。

そう考えれば、コスモスのその対応は妥当だったのかもしれない。

「本人がそれでいいと言うならば、周囲がどうこうする話でないような気もするが」

「言葉だけで全てが完結するなら、世の中喧嘩も戦争も起きません——あなたはよく知っているはずよ？」

「……返す言葉もない」

言葉で語り合えない場所で、言葉で語らう以上のやりとりを生む。

ヒメヨの出し抜けの鋭さは、そんなシンジヨウという男の黙らせ方を、よく知っている。

「——ただでさえ、イベントが大好きだった子なの。平気な顔して過ごしているけれど、きつと寂しいと思うのよね」

何度でも言える。ジムリーダーとしては最適な対応だ。

しかし望まれたものであるのかどうかは、まったく別の話。

本人の気持ちを聞かないことには仕方ないが、年頃の娘を子に持つ親の心というものも、一概に跳ね除けていいものではないだろう。

「だからね？ 誕生日じゃなくて、クリスマスという体で贈り物をしようと思うの。どうかしら？」

「成程。屁理屈だが、あいつも多少そういうところがある。きっと文句は言わないだろう」

「ふふ、珍しく饒舌になっちゃって。ちゃんとわかってきたわね、あの子のこと」

含んだコーヒーで噎せるといふ柄にもない姿は、後にも先にもヒメヨしか知らない。



コスモスに、クリスマスプレゼントを贈る——ここまでは良かった。

『どうせなら雰囲気を大事にして、サンタさんみたいに渡しませよう！』

『……コスプレをするのか』

『そんな大胆なことはいわないわよ。あの子が寝静まった頃、こっそり内緒で置いてくの』

『それはいいが……誰がその役を務めるんだ』

『あら、ちょうどいい人がいるじゃない。私たちのプレゼントを一度に持って、夜空を飛んで回れる、黒衣のサンタさんが』

まさしく竜に乗ったサンタクローズが誕生した瞬間であった。

「(……いくら家人と打ち合わせているとはいえ、不法侵入だ。それも枕元に立つなど……十分に大胆じゃないか)」

少なくとも、自分のような男がやっていいことではない。そう考えるからして、シンジョウはとてもとても気が進まない。

これならサンタのコスプレでもして手渡しした方がまだましだっ

たとえさえ思う。

が、どれだけぼやいても仕方がない。受けてしまった以上は、役割を果たさねばならないことに変わりはないし、責任もある。

「二三時四六分……間に合いそうだな」

市街地上空から外れ、時計を確認。

先程までの喧騒が嘘のように、静寂が訪れる。羽ばたくリザードンの翼に当たらぬようにして、携帯端末で執事『ブロンソ』へ、間もなく屋敷に到着する旨を伝えんとする。

「……？」

シンジョウは眉をひそめた。自分が連絡するよりも先に、そのブロンソから着信が入ったからだ。

「どうしました」訝りながらも、ひんやり冷えたスチールを耳に当てる。

『シンジョウ殿……今すぐ、備えを……』

「……何？」

『間もなく、そちらに——』

次の瞬間だ。

空気の渦が横向きになって、突っ込んできたのは。

「……——!!」

風の音の急激なうねりをいち早く感じ取ったりザードンのお蔭で、事なきを得た。

シンジョウは回避行動、旋回の上でなおバランスを取って、プレゼント入りの袋を抱え直す。

物騒な輩というものは、いつ、どこにでもいるものだな。そんな辟易交じりの独白と一緒に、正面へ向き直った。

何者だ——その相手は発するまでもなく、簡単に正体を明かす。

「お前は……！」

闇夜の暗さの中にあっても、確かに視認出来た飛竜の姿。

山吹色の躰に、力強い翼。髭にも似た触覚に、立派な一本角。

このシルエットを忘れるはずがない。

かつての自分がトレーナー生命をかけて挑んだ、この相手を。

全てを出し切つてようやくと打倒できた、この存在を。
そして叶うならば、二度と戦いたくないとさえ思ってしまった、この強敵を。

共に戦つたりザードンも主と同じく、目を点にした。

「カイリユー……」

シンジヨウの呼びかけに応じるように、対峙する存在は雄叫びを上げた。

間違いない。彼女が今しがた攻撃を加えてきた相手だ。この心音を乱すプレッシャーで、理解出来る。

何らかによつて屋敷で暴れ、ここまで飛んできた、といったところか。

「ああ、わかっている。あいつの意思は介在していない」

静かに向けられた肩越しのリザードンの視線に、言葉を返す。

傍らにコスモスがいない以上、単独行動は確定。しかし理由もなしに拳を振り回す存在でないのは、その気高さすら湛えた力を目の当たりにしているシンジヨウは、痛いほどに知っている。

何より眼が正気を語る。明確な意志を持つ。その上で、確実に自分を狙っている。

「……主を、守らんとしているのか？」

いや違う。そうじゃない。

たとえ言葉が通じなくとも、行き着く答えはただ一つであった。

「主の誓いを、守ろうとしているんだな」

カイリユーは、どこかの国では『竜騎士』ドラゴナイトと呼ばれるほど、主に忠実だという。

もし主君が、傷を負った人々のために祝福を拒んでいる事を知るならば。

いかなる恵みでさえ、悪と知りつつ突き放すことを是としているならば。

騎士はそのために動くだろう。戦うだろう。

黒衣のサンタでさえ、一翼の下に吹き飛ばすだろう。

「幸せだな。ここまで主を想うポケモンも、そうはいない」

まったく羨ましいよ。言葉にするとリザードンが面白くない顔をするので、胸にしまっておく。

「だが俺にも、俺の使命というものがある。……柄ではないがな」
逞しい勇姿を否定しない。されどシンジヨウは、カイリユ―と対峙することをやめなかった。

母ヒメコが正しいだなんて毛頭思っていないし、娘コスモスが何を思っているかなんて、そんなものはわからない。

「本当のところは、気だつて進まないさ」
けれども。

「だがな——俺がやることは、不思議とこれで正解な気がするんだ」

何故だか自分のこの行動にだけは、底抜けの自信を感じられて仕方がないのだ。

「いくぞ、リザードン」

雪空に、蒼炎が揺らめいた。

冬風で、黒翼がたなびいた。

聖なる夜に重なる二頭の竜の闘志は、季節外れの花火のように弾けたという。

十分ほどの交戦、だったと思う。

にしては壮絶すぎる相棒の傷を眺め「終わったら即ポケモンセンターだな」と溢し、歩き出すシンジヨウ。

二三時五八分にして、コスモスの屋敷の裏庭に降り立った。

「助かりました……ひとりでにモンスタールから出てきた時は、どうなることかと。このお詫びはいずれ、必ずや……」

「構わない。優秀なガードマンだ、うんと待遇を良くしてやるといい」
冗談交じりのやり取りを交わしながら招かれる、エイレム邸。ブロンソとメイドに案内されるまま屋敷内を歩くうち、コスモスの寢室の前に立っていた。

立ち止まって、改めて頭と服の雪を払い落とす。

カチャリ。メイドが合鍵で解錠した瞬間に、日付が変わった。

付き纏う戸惑いを口内をかみ殺し、ドアノブを捻ると、すぐ向こうには見知った少女が眠っかけていて。

「どうぞ」

もはや音にならない、口の動きだけの発話に促されるまま、足を踏み入れた。

物にぶつからないよう、足音を立てないよう、気配を殺して歩く。なるべく見るまい。下手なことはするまい。そんなことを考えるうちに、あつという間に辿り着く天蓋付きのベッド。

一人が寝るにはあまりに大きすぎるベッドだ、これならばプレゼントも置ける。

「俺のは元々、そんなにスペースを取るものでもないんだがな……」
カーテンをそつとどけて、手のひらサイズの赤い小箱を置いて飾り付ける枕元。

すう、すう。寝顔がこちらに向いていなくても、傍らで聞こえる寝息はしっかりと熟睡を教えてくれる。

水のように柔らかい銀髪から、純白の肌が月を覗いていた。

ふんわりと香るジャスミンの匂いで、出会った日の懐かしさを思い出す。

『コスモスと申します。勝ち続けるために生まれました』

彼女は、門番の一族で。

『“ジーク”の意味を理解していらして？ 勝利よ。私にはそれしかないの』

最強のジムリーダーで。

『新しい手持ちを育てたの。お見せしたいから、またバトルしましょう』

筋金入りの努力家で。

『聞いて、シンジヨウさん。頂いたりザードンがメガシンカを習得したの、勿論Xよ。そのうちあなたを超えてしまうかもしれないわね』
負けず嫌いで。

『シンジヨウさん、私、世界を救ったの。伝説のポケモンにも出会ったのよ』

ラフェルの英雄で。

『ねえ、シンジヨウさん』

それでも。だけど。どこまでいっても。

彼女は――。

「(お前は……)――)」

気付けば青年の掌は、少女の頭に伸びていた。

温もりが触れかけた時、漸く我に返って、急いで手を引っ込める。

「ああ、ダメだな。柄にもないことしてばかりだ」――静寂の中に自責の嘆息を、一つだけ。

ヒメヨの分のプレゼントも置いて、身を翻す。用が済んだらさっさと戻ろう、そうしよう。

「――夜這いにしては、随分と紳士的なのね」
「！」

そんな自分を引き止めた少女の声に、シンジヨウはひどく驚いた。

「……起きてたのか」

「いいえ。ぐっすり寝ていますよ。これは寝言です」

「そんな明瞭な寝言があるか……」

ああ、やってしまった。額に手を当てる身振りから容易に理解出来るシンジヨウの心情。

だがコスモスは寝ているからして、その後ろ姿を見ていない。あくまで背中を向けたまま。何故なら熟睡しているから。これは寝言だから。

「ひどいわ。久しぶりに会いに来てくれたと思ったら、寝込みを襲うなんて」

「起こしたのは、というか、諸々を詫げる。サンタクロースのつもりだった」

「こんな黒ずくめのサンタクロース、子供たちが泣いてしまうわ。私も怖いから泣いてしまおうかしら」

「……すまなかった。邪魔したな」

肩越しでさえ視認しないのは、せめてもの誠意だろうか。

シンジヨウは今すぐにも消えたい内心を隠すことなく、足を前に

出した。

「待つて」そんな彼の焦りを止める言葉が発されたのは、数秒後。

「今、寝ています」

「ああ、知ってる」

そう、彼女はどこまで行っても。

「だから、すぐに立ち去」

「寝ていて、何も聞こえない、から」

「？」

どんな存在に、なってしまうても。

『『お誕生日おめでとう』って、言ってもいいよ』

「……」

一人の、女の子なんだ。

「——コスモス」

「……はい」

「誕生日、おめでとう」

「……——うん」

大切な人に生まれを祝われるのが、嬉しいんだ。

人は英雄に言う。

「遠い場所に行った」と。

「高みへ至ってしまった」と。

されど彼女を知る者は、そうは思わない。

何故なら彼女の傍には、竜を落とす戦士がいる。

竜と化した彼女をいつでも少女へ引き戻してくれる、ジークフリート竜殺しがいる。

だから、どんなに進もうが——きつと、関係ないのだろう。

竜に笑顔を思い出させる、彼がいる限り。

「……これじゃあ、度胸があるのかないのかわからないわね」

「おかしな人」寝転がったままクスリと笑うコスモスが天井にかざした手には、プレゼントのシルバーリングが煌めいていた。